

横浜開港の立役者、上田藩主にて徳川幕府老中 松平忠固と上田藩の人々

布施 修一郎(6組)

「老中松平忠固と生糸貿易研究会」と私が会長を務める明倫会(上田松平藩士の子孫と、有志による会)が共催した上記の調査研究発表会が9月20日の午後から21日の二日間に渡って(添付チラシ)、約200名の参加を得て開催されました。当初は、18名の研究者の参加予定のところ都合により15名に減少したとは言え、一般市民向けにこれだけのボリュームの講演会が開催されたのは珍しいことと言えます。以下、その内容を総括したものを、いささか長文になりますが報告します。

江戸幕府の政治の舵取りを担ったのは老中たちです。開国・開港期の老中や大老としては阿部正弘、堀田正睦、井伊直弼らが有名で彼らについての研究は多く行われてきました。しかし、日米和親条約と日米修好通商条約の調印という激動の時期に老中として長期間にわたり幕府政治に参画し、開国・開港や開市を推し進め、輸出の準備を進めた老中松平忠固(上田藩主)については本格的な研究がありませんでした。

本年、7月に上梓された岩下哲典編の論文集「幕末の老中松平忠固～政治・生糸貿易・上田藩～」吉川弘文館(以下本書)は、日本史上に松平忠固という知られざる幕末政治家の役割を位置付けるための基礎的な本格的な研究書であります。今回、本書で発表された各論文に沿って発表会が行われました。



研究成果は以下の通り：

1. 上田博物館における忠固関係の多くの新史料の発掘
 - ・ 老中になる前の寺社奉行時代、弘化2年(1845)、オランダ国王の開国勧告親書に対する忠固の意見書が発見されました。従来全く知られていない史料です。
 - ・ 藩政史料の中から、忠固の大名間の交際・交流関係の解明が進みました。
 - ・ 忠固が藩主時代の産業育成や医療政策、飢餓対策についての実態解明が進みました。
 - ・ 忠固の老中日記の全解読が完了し、現本・写本が残存する老中日記は全て翻刻されました。老中としての忠固の勤務実態が初めて明らかになりました。
2. 親類諸藩での忠固関係の史料の発掘

- ・ 実家の姫路藩(現、姫路市を中心とする譜代大藩)、兄が藩主であった田原藩(現、愛知県田原市を中心とする譜代小藩)、母の実家である親類の遠州横須賀藩(現、掛川市を中心とする譜代小藩)に関する史料調査を現地実施しました。
- ・ 姫路市立城郭研究室、田原市博物館、掛川市立図書館に調査に赴きました。
- ・ 忠固は姫路藩主の後継人事に関与したり、田原藩主の相談相手になったりするなど、姫路藩酒井家の親族ネットワークの中で、中心的な立場で活動していたことが浮かび上がってきました。
- ・ 田原市博物館には忠固についての史料(藩政日記や砲術家の記録など)が豊富に残されており、その調査を通して、例えば老中時代の忠固がライフル銃を試作していたことなど、全く知られていなかった事実が明らかになりました。

2. 開国・交易のキーパーソンとしての忠固

- ・ 文政年間に遡って上田藩の生糸・絹産業の振興策を調査・研究しました。
- ・ 上田藩での絹産業の振興策と老中時代の開国政策は、車の両輪として展開されていったことが裏付けられました。
- ・ 忠固によって基礎づくりがなされたと考えられる蚕都上田の明治以降のさらなる展開として、小県蚕業学校校長の三好米熊(長州藩関係者)の功績まで一連の流れが明らかになりました。

4. 幕末の政争の中の忠固

- ・ 忠固はこれまで、紀州藩主慶福を14代将軍に迎えようとする井伊直弼を中心とした「南紀派」と、目され、井伊の党与として扱われてきましたが、それが誤りであったことが明らかになりました。
- ・ 忠固は、南紀派とも、一橋慶喜を推す一橋派とも一線を画す独自の政治的スタンスであったことが裏付けられました。
- ・ 忠固と京都の公家、例えば姫路藩の縁戚の九条家や上田藩の縁戚の広橋家との関係の解明も進んできました。
- ・ 最幕末の京都に於ける、忠礼(忠固の後継藩主)の活動と上田藩庁と江戸藩邸のやり取りなども目新しくあります。

5. 忠固が藩主時代に活躍した上田藩の人物についての研究

- ・ 赤松小三郎の他にも、上田藩には八木剛助、櫻井純造、恒川才八郎、芦田柔太郎、上野尚志、服部半左衛門、城下商人の成澤寛経など魅力的な人物がおり、彼らの実像の解明が進みました。
- ・ そのうち、明治時代に教育家として活躍した上野尚志は、忠固への建白書の提出により失脚させられてきたが、その背景に忠固と前水戸藩主徳川斉昭の対立があり、水戸藩が上田藩士を自派に引き込もうと工作していたことなど、国政レベルでの政治的背景があったことなどが明らかになりました。

- ・ 櫻井純造の薩摩藩留学は従来全く知られていませんでしたが、芦田や赤松を中心として上田藩の洋学がどのように位置づけられるのかこれからの課題の一つです。
- ・ 絵師として著名な服部半左衛門が実は経済官僚だったこと、成澤寛経と国学や赤松と関係も、これまで検討されてきませんでした。

以上のように、新しい発見もあり意義ある発表会でしたが、上田博物館の松平藩に関する古文書の解読はまだ全体の1割ほどだそうですので、今後も解読が進められていくことにより更なる新発見が見出されることに期待したいと思います。

忠固公を中心にした大河ドラマ化、映画化を目指す私たちとしては、一歩二本と進めてきたことが、今回の論文集の発刊、発表会により大きく前進したと自負しております。



関係者懇親会にて

以上

2025年9月26日 記